

講演会及び研究集会の記録

弘前大学高大連携シンポジウム

テーマ 「高校時代に大学の単位を取る」

(21世紀教育センター)

本学では、平成13年10月、弘前高等学校の「生徒へ多様な学習機会を提供したい」との申し入れを受け、文部科学省との協議、青森県教育委員会との連携により平成15年4月より「高大連携高校生セミナー」を開催してきた。平成19年度より「高大連携公開講座」として受講科目の単位認定が可能となり、平成21年度入学生からは、高校時代の取得単位が入学後に本学の単位として認定されることとなった。以上の経過を踏まえ、第8回目高大連携シンポジウムは、8月6日(木)「高校時代に大学の単位を取る」というテーマのもと、総合教育棟404講義室にて開催された。木村宣美21世紀教育センター長の開会挨拶の後、長南FD広報専門委員会委員の司会により、学生3名、高校教員2名および大学教員2名による話題提供とフロアとの意見交換がなされた。

【話題提供者の発表内容】

1. 単位取得学生：高校時代に公開講座にて単位を取得し、今回入学後に取得単位を大学の単位として認定された学生3名から、受講の目的、メリット・デメリット、単位認定に対する感想などが発表された。

1 永澤里沙さん(人文学部1年)

受講の目的は「弘前大学を知りたい」という気持ちであった。受講科目「経済学の基礎A」は難しく両立も大変であったが、やり通せたことで達成感があった。受講によって自分の学びたいことが明確になり、進路への迷いも吹っ切れ、弘前大学進学への切っ掛けとなった。また、大学の授業や環境に慣れたことで、よりよい緊張感を持って受験に臨むことができた。入学後の履修計画も立てやすかった。入学後に単位認定のことを知り、受講は大変であったが、高校時代に単位を取得して良かったと思っている。

2 松山英里香さん(教育学部1年)

受講目的は「大学の雰囲気慣れる」「興味のある芸術について専門的に勉強する」ことであり、「芸術学の基礎」を履修した。授業は予習・復習もなかったため高校との両立もしやすく、楽しい内容であった。大学生が自立的に学んでいることも実感できた。課題のレポートにも挑戦したが、書き方が分からず苦労した。しかし、終了後には自分自身のキャンパスライフが見え、目標を明確にすることができた。通い慣れた環境



のため、心に余裕を持って大学を受験することができた。単位認定については入学後に知ったが、希望する免許取得のための履修計画に役立っている。このように貴重な学びのできる制度を、後輩達にもっと知って欲しい。一足先に大学生活を経験することで、高校生活がより有意義なものになってくると思う。

3 水木悠太さん(医学部1年)

受講目的は「大学の講義・生活を体験し、進路を考える」ことであった。高校でも学習したことから「地理学の基礎」を履修したが、知識の伝達のみならず、学生の考えを深めることが求められ、大学ならではの空気を実感した。高校との両立の中で自己学習の時間捻出に苦労し、大学生として自ら学ぶことが如何に大事であるかを痛感した。大学の施設(学生食堂や図書館等)を利用するなど、出前講義では味わえない経験もでき良かったと思う。一学生となって体験出来る公開講座は、進学を目指す人、大学生活を知りたい人に是非勧めたい。また受講生は分からないことが多く不安な気持ちを抱いているので、受講経験のある大学生(ガイドとして)を事前に紹介いただけると心強いと思う。公開講座に参加して得られるものは単位だけではないので、是非高校生に参加して欲しい。

2. 高校教育の立場から：各校のこれまでの実情と今後の方針や課題等の発表がなされた。

1 奈良昌孝先生(弘前高等学校教諭)

平成12年度卒業生に対し大学の研究室訪問や出前講義を実施した結果、生徒が非常にやる気を出したことから、平成13年度進路指導や学習指導の改善をめざし「弘前大学の授業聴講」を要請することになった。現在

の「高大連携公開講座」は、このことが契機となっている。高校では、公開講座受講の目的を、大学や社会で求められる力の理解、高校での学習の重要性認識、学問に対する理解の深化、能力や興味・関心の伸長、大学の理解と進路意識の向上、として、受講を勧めている。更に平成17年度からは、受講科目の単位を高校の教科の学習単位として認めるようになった。

これまでの受講生の感想や進路の状況を振り返ってみると、公開講座を受講することがその後の進路決定につながっており、受講科目の6割以上が進路と合致している傾向であった。その他の生徒は科目への興味関心で受講し、必ずしも進路とは合致していないが、いずれにしても受講後の進学に対するモチベーションは高く、良い刺激になっていることが窺える。受講科目の単位が認定されるようになり、不合格の生徒も出てきているが、その結果は必ずしもマイナスとならず、更に学習する意欲につながっている状況もある。学年によって受講者数、受講科目に違いはあるが、今後も同様のアプローチを進めていく予定である。

2 野呂直宏先生(弘前中央高等学校教諭)

公開講座受講の意義は単位の取得ではなく、大学の授業を受け、そこから何を感じたかであり、専門的学習へ触れること、興味関心を伸長することが重要と考える。過去の受講生の感想をみると、未知の部分に対する驚きや発見などから大きな刺激を受けている。進路に対するモチベーションがあがり、生徒自身の生き方あり方を改めて考える機会ともなっている。進学を目指す中で受講は、生徒自身が主体的に大学選択をすることにつながるため、意義のある機会であると思われる。

一方問題として、年々受講生が減少している現状がある。原因としては放課後直行しなければならず、学校の活動を途中で抜ける場合もあるなど、諸活動への支障や、冬場の移動の大変さがあげられる。意欲的な生徒も多いが、受講に伴う負担について不安を抱えている。また教員間の意識の違いが、生徒への指導の違いとなっている現状がある。大学側では教員間に意識の違いはないのか気になる点であり、今後に向けもっと双方の意図を知り合うための密な情報交換の場が必要と考える。

3 大学教育の立場から：高校生受け入れの経験をもとに、実情や課題などが発表された。

1 李 永俊先生(弘前大学人文学部准教授)

「経済学の基礎A」を担当し、平成19年度から3年連続で高校生を受け入れている。授業の中で大切にしていることは、経済学を学ぶための基礎的能力を身につける。経済学を紹介するの2点である。授業アンケートには、内容はかなり難しいが、コラムはためになる等の感想があった。高校生には、高校での学び

がいかに重要であるかを知って欲しいし、正しい進路選択の参考にして欲しいと考えている。しかし、大規模クラスのため、高校生への手助けが難しく、意見交換の場を提供することも困難な現状である。また、成績評価については、高校生と大学生の評価基準を一律にはできないと考え、学力の差を考慮した評価を行ってきた。今後の課題と考えている。

2 檜垣大助先生(弘前大学農学生命科学部教授)

「地理学の基礎」を担当している。基本的に「地理学」は社会に出てから学習するための動機付けの意味合いが強いと考え、高校生・大学生の区別なく同じ姿勢で臨んでいる。高校2・3年生が受講する場合、試験やレポートに大学生との差はないと思われる。高校生向けに準備するドリーム講座とは異なっているので、段階を踏んで公開講座を受講することが進路決定の上で参考になると考える。大学生との交流の機会が非常に少ないため、今後検討していきたい。

【意見交換の主な内容】

履修科目選択に関する対応、成績評価や単位認定に対する考え方、講座受講に対する地域的な問題などについて熱心な意見交換がなされ、今後の課題も確認された。

*「受講のために高校生活で犠牲にした点、」では、電車通学のため自己学習の時間確保が大変、部活動の時間減少、部活動の合間に受講し週末勉強など、学習時間の捻出に苦労しながら対応している状況があった。

*21世紀教育の基礎教育科目には「高校の学習の上になり立つ科目」も多く、授業について行けない可能性があるため、ステップアップの形で科目を選択することが望ましいし、9・10時限の開講科目を考慮する必要があるとの意見が出された。関連して、大学側の情報提供の仕方、生徒の科目選択の方法や高校側の指導について確認がなされた。

*入学後に公開講座の取得単位を大学の単位として認定することに対し、高校・大学双方からシステムとして検討の余地があるとの意見が出された。高校側での学習単位認定も含め、今後の大学側の対応について確認する必要がある。

*大学生の授業アンケートで、履修制限のある科目に高校生が入ることでの不具合を指摘する声があった。単位認定の問題も含め、今後検討の余地があると考えられる。

*大学側より、遠方のため受講できない生徒に対し、何らかの対策を講じる必要があるのではないかと発言があり、関連して、東京大学での工夫が紹介された。